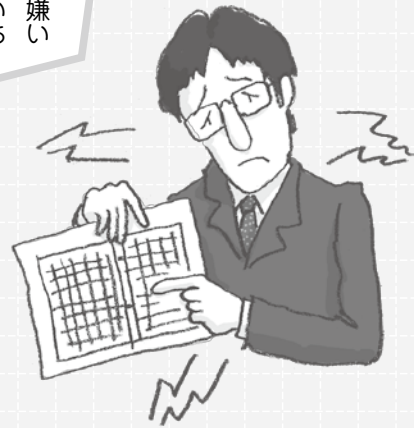


「書くこと」の学習の前に

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q

作文の嫌いな生徒にどうして嫌いなかと聞いてみると、やはりちばん多いのが、
「何を書いているのか分からない」「どう書きだしているのか分からない」というものでした。
生徒が進んで書き始める工夫について教えてください。

A

原稿用紙やワークシートを渡して、さあ書きましようと言ったとき、ぜんぜん鉛筆が動かない生徒がいます。もちろん、考えているのだとは思いますが、やはりそんなときはこちらの指導が足りないときです。
「書きたい」と思えなかったこと、「何を、どのように書けばいいのか」を教師が具体的にイメージできていないことが大きな原因だと思っています。
作文や書くことの学習指導は、まず



生徒たちに何を、どう書かせたいかという教師の側の具体的なイメージが大切です。そのためには、書かせる前に教師がどのような準備をしたかが鍵となります。私たち教師は書かせる前にどのようなことをすればいいのでしょうか。
今回は具体的な例を紹介しながら、書くことの事前指導における教師の仕事をいくつか挙げてみましょう。

まずは教師が書いてみる

読むことの教材研究はよくやるのに、書くことの教材研究はどうしたらいいかということを探る人がいます。確かにどうすることが書くことの教材研究なのかわかりにくいですね。

私は、何はともあれ生徒に何かを書かせる前に「自分で書いてみる」ということを自分に課しています。課題を出された生徒の側に身を置いてみるのです。全部を完成させる必要はありませんから、小さな作文もメモもとにかく自分で書いてみます。そうして初めて、自分が出した課題の困難点や大変さ、おもしろさが自覚できます。

例えば「少年の日の思い出」を例に考えてみます。「初発の感想を書きましよう」という課題を出したとします。何のヒントも書き方も示さない場合はどんなことを頭に浮かべ、どんなことで迷うでしょうか。かわ

いそうな話だったなあ、とか、盗みを働くなんていけないことだよ、とか、エーメールって嫌なヤツだったなとか、何となく切れ切れに思い浮かびます。決して何も思っていないわけではないけど、何からどんなふうに書けばいいのか戸惑ってしましますね。

そういうふうに生徒の側に身を置いてみると、書くまでに至る思考の流れがなんとなくつかめます。どこで迷うのか、なぜ困るのか。

そこで、登場人物に絞ってみるのはどうだろうか、場面を区切ってみてはどうだろうか、言葉に立ち止まらせてはどうかなどの「てびき」の原型のような発想が生まれます。例えば次のような切り口を示したら少しは書けるかも知れません。

■登場人物についての感想を書きましよう。
・僕
・エーメール
・お母さん

■僕が盗みを働いた場面について

て書きましよう。
■エーメールの「そうか、つまり、君はそんなにやつなんだな」という言葉についてどう思いますか。

「感じたことを自由に書きましよう」「何を書いてもいいですよ」「好きなように書きなさい」というような指示の出し方は力のある生徒には有効かもしれませんが、書くことに慣れていない、書くことが嫌いという生徒にはあまり有効ではありません。

「自由」に書いていいけれど、もし参考になるのだったら次のようなことを書いてもいいですよ」と言った方が助かる生徒もたくさんいます。「夕飯、何にする?」と聞いたとき、「何でもいよ」と言われるより、「カレーが食べたいな」とか、「肉かな」とか「野菜たっぷり」と具体的に言われた方がやりやすいのと同じですね。

もちろん、初発の感想を何のために書かせるかによって、てびきも違ってくると思いますが、まずは自

書きだしの例を考える

分で書いてみよう、生徒の身になって書いてみようという発想を常にもってもらいたいと思います。そこが私たちの仕事の第一歩だと考えています。

まずは自分で書いてみるということが大事だと述べましたが、次に書きだしだけでも書いてみるということをおすすめしたいと思います。出された課題に対してどんな切り口があるかを考えるうえでも有効な教材研究です。

大村はまさんは、「修学旅行」題として次のページのような書きだし例を提示しています。「大村はま国語教室5」（筑摩書房）P269～271から抜粋。

修学旅行のような大きな出来事ではいろんなことを子どもたちは感じています。けれども書きたいことはたくさんあっても何をどう書いて

